

国学者の絵巻模写：長沢伴雄稿『年中行事画卷略』 を中心に

亀井，森
鹿児島大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/4776878>

出版情報：語文研究. 130/131, pp.280-293, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



国学者の絵巻模写

——長沢伴雄稿『年中行事画卷略』を中心に——

亀 井 森

はじめに

宮内庁書陵部に長沢伴雄稿『年中行事画卷略』(天保十四年正月成稿、大本二冊)という写本がある。本書は『年中行事絵巻』を白描で部分模写し、巻頭にその成立について考証したものである。

本書の著者とされている長沢伴雄(一八〇八—一八五九)は本居大平に従い、国学・和歌を学んだ紀州藩士で『類題和歌鴨川集』の編者として夙に知られているが、有職故実にも強い関心を持っていたことが分かっている。また天保期の紀州藩は、第十代藩主徳川治宝の学問愛好を受けて、江戸において伴信友や塙保己一らの蔵書の書写や、京において絵巻模

写を行うなど学問振興に努めた。そして、これらの実働部隊の一人として考えられているのが長沢伴雄である。

本稿はその長沢伴雄が関わった絵巻模写の一端を提示し、国学と絵巻模写との関係やその背景に横たわっていると思われる有職故実研究や大名文事への視点を指摘するものである。また本書は復古大和絵師の冷泉為恭との共作の可能性がある。天保十四年頃の長沢伴雄の動向や冷泉為恭との関係を軸に本書の成立について考えてみたい。

近年、光格天皇の研究が進展し、光格天皇が進めた造営や儀礼の復興における絵巻・記録図等の在り方が注目されている。本稿ではそれらの動向を踏まえ、近世後期の絵巻模写と国学の関わりやその目的を提示したいと考えている。

一 『年中行事画卷略』

『年中行事絵巻』は平安後期の宮廷行事や祭礼、法会などを描いた絵巻物で、原本は六十巻といわれ、後白河院の命で常磐光長らが描いたが、現在は寛文元年（一六六一）頃に住吉如慶らが模写した十六巻のほか、数種の模本が伝えられるのみである。その『年中行事絵巻』の模写に関わるものとして本稿で取り上げる『年中行事画卷略』がある。

本書は宮内庁書陵部蔵。大本二巻二冊写、長沢伴雄自筆稿、長沢伴雄旧蔵本である。巻頭に長沢伴雄による「年中行事画卷」（天保十四年成稿）八丁を附し、『年中行事絵巻』の部分模写一二五丁からなる。^{〔注〕}

本書については相馬万里子「書陵部蔵『年中行事絵巻』諸本について」（『書陵部紀要』第二十七号、宮内庁書陵部、一九七五年）にその概要が述べられている。

『年中行事画卷略』は、部分抜書の集成とでもいうべきもので、現存の「年中行事絵巻」のうち、鷹司本の一部分を除けば、ほとんどの巻からの抜写が収集されている。序に「年中行事画卷」と題する長文の考証が附けられている。筆者は国学者長沢伴雄で、「天保十四年正月稿」と

ある。この考証で、長沢伴雄は、『年中行事絵巻』の成立につき、『源氏物語』絵合の巻に見える、延喜の帝が詞書を書かれた年中行事絵巻を實在のものとみており、これに後白河院が書き継がせ、さらに順徳天皇が、飛鳥井雅経と光長にこれらを写させたのであろうとの意見を述べている。（四十四頁）

ここに述べられているように本書は『年中行事絵巻』諸本からの抜書となっている。また成立についても長沢伴雄は自説を述べ、『年中行事絵巻』は成立時から六十巻あったのかどうか疑問を呈し、延喜御本・後白河法皇本・常盤（土佐）光長本の三種が混在していると指摘する。さらにこの三種は識別できるとして「これ等の事は、本篇^{〔古画考〕}の画やうの条々に弁へおけるを見てしるべき物ぞ」と結んでいる。

長沢は藩命（あるいは徳川治宝の命）を受けて、天保六年（一八三五）より江戸、同九年頃より京都に滞在し、『年中行事絵巻』を始め『春日権現験記絵巻』『一遍上人絵伝』^{〔注〕}『善教房草紙絵』『法然上人絵伝』などの模写に関わっている。おそらく彼は自らの鑑識眼には自信を持っていたと考えてよいだろう。しかし、長沢が述べた成立や系統の混在などについて相馬氏は次のように述べている。

現在では光長が後白河院時代の原本筆者であらうと考証

されており、延喜本など三種の混在という考え方は認め難いが、どのような点によってこれらの行事絵を識別したものであろうか。現在『古画通考』という書の内容は知られず、伴雄の考証は知ることは出来ない。(同)

このように本書はあまり評価されていないが、相馬氏が言及した所在不明の『古画通考』は現在、国立台湾大学図書館長澤文庫に所蔵されている。

長澤文庫は戦前の台北帝国大学（現国立台湾大学）時代に購入された長沢伴雄の蔵書の一部である。『古画通考』（長澤文庫0580）はその中に含まれているが、コロナ禍の渡航制限によって現地調査は行うことができなかった。『國立臺灣大學圖書館典藏「長澤文庫」解題目録』（高橋昌彦主編、國立臺灣大學圖書館、二〇一三年）によれば次の様である。半紙本一卷一冊写。五十六丁（貼紙八紙）。長沢伴雄自筆。「古画について諸本を引用して考証を施したもの」と簡単な解題が付されている。部分的に得られた本書の複写から推測するに、長沢が実見した絵巻や今後の研究テーマの心覚えが記されており、『年中行事絵巻』模写に関する記事があるかもしれない。後考を俟ちたい。なお、同文庫には『年中行事』（長澤文庫05742）、『福富草紙詞書』（同05813）など絵巻関連とおぼしき書籍が収められている。

二 冷泉為恭との共作

前節で触れたように長沢伴雄は天保から弘化にかけて江戸・京都で絵巻・貴重書の模写・古書購入、有職故実修行など様々な動きを見せているが、その活動の一環として『年中行事画卷略』が製作されたと考えてよいだろう。本書についてこれまで巻頭の考証、および模写部分も長沢伴雄筆と考えられてきたが、本稿では一步踏みこんで、本書の考証部分は長沢伴雄によるもの、模写部分は冷泉為恭の手によるものではないかと考えている。本節ではその可能性を考えていきたい。

まず冷泉為恭について、文政六年（一八二三）生、元治元年（一八六四）没、享年四十二。復古大和絵師。十代から才能を発揮し、絵巻模写の他、多くの障壁画や白描画、仏画を残している。幕末の動乱に巻き込まれ非業の死を遂げた絵師としても知られている。国学との関わりで語られる時、必ず引用されるものとして西田直養の『国画復古』（『笹舎漫筆』巻十）がある。冷泉為恭の才能は早くから国学者たちの目に留まっており、小倉藩京都留守居役を務めていた西田直養は当時十七歳の為恭について「才いみじく画尤工なり」と褒め、為恭が「見て腹に入れられたる画卷」九十点ほどを列挙して

いる。

長沢伴雄と為恭とは、西田直養が為恭と面会したその翌年（天保十一年）に対面した記録が長沢伴雄の日記に残っており、以後、長沢は為恭に『善教房草紙絵』『春日権現験記絵卷』などを模写させている。

また前述したように長沢伴雄による本書の考証部分（「年中行事画考」）は天保十四年正月に成ったが、この頃、冷泉為恭も江戸木挽町狩野家の狩野晴川院養信からの依頼を受け『年中行事図巻』を製作し献上している（天保十四年二月五日冷泉為恭奥書。細見美術館蔵）。つまり同年一月二月は長沢伴雄、冷泉為恭ともに『年中行事絵巻』に関わっていたのである。

さて改めて本書の部分模写をみていきたい。論文末に掲載した図1は本書模写部分の冒頭「朝観行幸」で、白描（一部着色）に細字で配色などの注記が書き込まれている。長沢伴雄が素人ながらも丁寧に模写した可能性も十分に考えられるところだが、図2「内宴」模写部分（二十九丁裏）に次の様な注記がある。

ヒトへ白文スミノ色目付ハ、白ニ白デイノ文ノカハリタルニヤアラン哉。恭愚案

この書き入れの意味は分かりにくいが次の様なものになる

であろうか。「この部分はこれを模写した原本では」単衣白綾に墨色を付けているが、（正しくは、あるいは元は）白地に白泥（をもりあげて書いていた）文様だったものから変わったのではないだろうか」という内容である。つまり注記を施した人物が、自分の知識や経験から考えると、この部分は単衣で白綾に墨の配色は用いない、本来の配色から変わったのだらうと注記しているのである。長沢伴雄が自らの知識を生かして模写原本の誤りに気づいたとも考えられるが、末尾「恭愚案」はどういうことであろうか。

近世後期の国学者は知識や情報を共有することで、論文・資料の質や研究分野のレベルを向上させようとする傾向がある。^(注4) その一つの方法として彼らは自分たちの考証を開示し批評を乞うことがある。彼らは見せられたものに付箋や押紙、あるいは直接に批評や異見を書き込んで返却する。その際、批評を書き込んだ者が自分の名前を記して末尾用いる形が「愚案」である。つまり本書には長沢以外にもう一人関わっていると考えられる。もちろん長沢の書き入れの可能性も捨てきれないが、その場合も他者への提示や提出などが想定される。これについては第四節で触れる。

長沢以外の別人が関与している場合、愚案の前の「恭」をどのように読むかを考える必要がある。「うやうやしく愚案」

と読むことが考えられるが、「恭」「愚」を重ねるのはすこし謙辞が過ぎる。前述したように、批評・異見の書き方としてここには人名が入ることから推察すると、「恭」は人名（あるいはその一部）なのではないだろうか。長沢周辺の人物で「恭」の字を持つ人物は冷泉為恭である。

ただ「為恭愚案」と書かれていない以上、ここからは推測を出るものではない。しかし、為恭の「為」字は生家の父また冷泉家の通字であることから略すこともあるだろう。さらに本書考証部分成立時の天保十四年一月と同時期に為恭も『年中行事絵巻』に関わっていたこと、有職故実に精通し、その知識や経験から模写原本の誤りを指摘していることなどを考え合わせると、あながち無謀な企みとも言えないのではないだろうか。

つまり本稿では、本書の書き入れは為恭筆、あるいは模写部分も為恭の手によるもので、考証部分は長沢が担当した共作という可能性を指摘しておきたい。次節では模写部分についていくつか例を示し、識者の批評を乞いたいと思う。

三 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』

京都府京都文化博物館に冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』

（同館管理。卷子装一巻、紙本淡彩。谷口香嶠旧蔵。日Y-1259）がある（図3）。『年中行事絵巻』の内、「蹴鞠」部分のみの模本だが、『年中行事画巻略』の該当部分と対照させてみる。

図4は上図が長沢伴雄『年中行事画巻略』、下図が京都文化博物館本である。上図の書き入れ「童ノ左ノ手ノ所本ノマ、」は童子の左手の部分は（不自然だけれども）原本のままという注記だが、下図の為恭筆も同じように不自然なままである。

図5も同様であるが、蹴鞠に興じる人物である。かなり相似していると見てよいのではないかと思うが、図6はすこし顔が異なるようである。

次に『年中行事画巻略』の書き入れと冷泉為恭の落款を比較してみた。図7として掲げたのは以下の落款である。（a）は図2で掲げた二十九丁裏の書き入れのうち「恭」字を拡大したものである。（b）は図4から図6で比較した京都文化博物館本の落款である。（c）は比較的近い時期の冷泉為恭の落款として天保十二年に模写された『善教房絵詞模本』^{（主）}（大和文華館蔵）のものを並べている。

- （a）長沢伴雄『年中行事画巻略』「内宴」書き入れ
 - （b）冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館）
 - （c）冷泉為恭筆『善教房絵詞模本』（大和文華館）
- 一見して（a）と（c）は右払いが似ているが（b）は字形

が似ているとは言えない。ただ書き入れと落款を単純に比較することができるかどうか、その是非は議論の余地があるだろう。

以上、『年中行事画卷略』の模写部分における冷泉為恭筆の可能性を探ってきた。模写部分には近いもの、同筆ととらえてよい部分もあるかと思う。ただ書き入れと落款の類似については必ずしも首肯できるものではないが、ここで改めて長沢伴雄と冷泉為恭とのこの時期の交流を振り返ると次の様である。

前述したように天保十一年七月に長沢伴雄は初めて為恭と面会した。翌十二年三月には長沢伴雄は為恭に『善教房草紙(注6)』模写させ、十四年五月には鷹司家蔵『春日権現験記絵巻』の模写が始まり、原在明・浮田一蕙らとともに冷泉為恭にも絵師として声が掛けられている。さらに冷泉為恭が同年六月より模写を開始した知恩院蔵『法然上人絵伝』に長沢伴雄も関わっている可能性が(注7)ある。

本稿では本書の模写部分は冷泉為恭筆の可能性があるということを指摘するだけに留めておくが、いま述べたような長沢伴雄と冷泉為恭との関係性の中で、天保十四年正月の本書模写部分の制作が行われたことは十分に考えてよいだろう。

さて次節では本書の持つ意味を考えていきたい。国学と絵

巻を繋ぐ有職故実研究、ひいてはそれを牽引する大名の文事との関わりを指摘し、近世後期の学芸のありようを考えてみたいと思う。

四 大名文事としての絵巻模写

国学者が復古大和絵師と交流を図ることにどのような意図があるだろうか。一つは物語解釈への還元が挙げられよう。例えば国学者萩原広道が著した『源氏物語評釈余釈』(文久元年刊)という源氏物語注釈書がある。彼は長沢伴雄が手がけた『類題和歌鴨川集』の編纂を補助したことでも知られるが、その一之巻「空蟬巻余釈」に中河家の見取り図を掲げている(図8)。

萩原広道は帚木巻空蟬巻に登場する中河の邸について、その間取りや人の移動はどのようなになっているのかを長沢伴雄へ相談した。長沢は図を作製して萩原広道へ送り、広道はその図をそのまま版にしたという。朱墨二色刷。帚木巻は朱、空蟬巻は墨で示し、広道は図を示した意図を次のように述べている。

此段の事(人物配置・邸の間取りが不明瞭なこと)を長沢氏のもとへかたらひやりてあげつらひしに、図カを作り

ておこせられぬ。かくては心得やすげなれば右に其図を
さながら挙て初学の人に示す。帚木巻のさまをもついで
に記したれば合せ見て大かたをさとるべし。(四十一丁
裏、丸括弧内は亀井注)

初学向けとして掲出されているが、萩原広道も分かってい
なかったのであるから、源氏物語解釈の難所であるといつても
よいだろう。^(注9)

このことが絵巻模写の直接の成果だとは言い切れないが、
長沢は絵巻を模写・研究することは物語解釈に生かせると考
えていたのではないだろうか。『年中行事画巻略』をまとめた
天保十四年頃、古書画を模写することの意義について長沢伴
雄は日記の中で次のように語っている。

古書古画古器物の類、何もみな珍しかる物とも摸して後
世に伝へおくべし。就中古書画はそのかみの事をするに
いと便利よろしき物なれば別てあまたに摸しおくべし。

(静嘉堂文庫蔵『絳石の落葉 天保十四年四月』、四月十
二日条)

長沢伴雄は有職故実を熱心に学んでいたことが知られている。
江戸では武家故実を学ぶために伊勢家に入門し、京都では有
職家の高倉家に入門して衣文伝受を受けている。同年五月十
日の日記では知恩院蔵の『法然上人絵伝』の模写を画策して

いることを示した後、有職故実研究の意義を語っている。

いつも／＼人にいふやうすべての事、その根源をしらず
してその末のしらるべきやうやはある。有職の学といふ
は宮風^{ミヤカゼ}の故事なり。その宮風とは朝廷の儀典を申す。そ
の朝廷とは則、神の御末裔なれば、まづその神代の故事^{フルゴト}
の實の根源をしりて、然して□^(虫讀)さまに推降して今の現世
の御手風にまで心をこめて古今相照して事実研究するに
あらではまことの職学とはいひがたしと口究めてはいへ
れど、おのれはその十が一もいまだ学得ざるをはかなみ
おもふからに人にも然いひてす、むるなり。

(台湾大学図書館長澤文庫蔵『絳石の落葉』06073、天保
十四年五月十日条)

このように国学者が有職故実を学ぶことは、国学が本来持ち
あわせていた、根源を探ろうとする理念と通底するだろうが、
実際には先述したような物語解釈や絵巻模写に援用されたと
考えられる。

また復古大和絵師としても国学者との交流は益が少なから
ずあったであろう。これについては、寛政の御所造営以後、
主導した光格天皇が儀礼の復興を目指し、古画や古い絵巻を
典拠とした調度・服色の再現を求めたことなどが、近年、美
術史・歴史・文学各方面から明らかにされている。^(注10) 絵師たち

が古画を研究し、さらに有職家や国学者たちからも知識得たことで京都の画壇では絵巻模写や古典の解釈が進んだとされている。

さて、これまで長沢伴雄という紀州藩士の文事に着目してきたが、数十巻にも及ぶ絵巻の模写は一介の藩士が成し得るものではない。資金的なものはもちろん、当時、門外不出としていた鷹司家所持『春日権現験記絵巻』などの借り出しには政治的な交渉が必要であつたはずである。このように近世後期の絵巻模写には個人レベルの文事とは別の側面が垣間見える。それは大名文事としての側面である。

近世後期の紀州藩の文事は藩主徳川治宝（第十代藩主。一七七一一一八五三）を中心に進められた。治宝は本居宣長・大平を保護して学問を振興し、熊野三山貸付けなどの豊富な資金源を基に隠居後も力を持ち続けた人物である。長沢伴雄の文事は、江戸滞在中に行われた伴信友所蔵の貴重書の模本作成や書物収集、京都での有職故実修行など治宝の意向を受けたものが多く、この長沢の絵巻模写も治宝の命による文事と考えられる。このように考えたとき、『年中行事画巻略』が長沢伴雄と冷泉為恭の共作であるならば、本書は以下に述べる「チーム紀州藩」を象徴する作品といえるのである。

治宝時代の紀州藩では、絵巻模写・書画購入において長沢

ら国学者のほかに紀州藩お抱え鑑定士・絵師が存在する。治宝は長沢伴雄や同じく紀州藩士加納諸平に古書の購入・絵巻模写などを命じ、そのサポート役として古筆鑑定の大倉好斎や絵師の岩瀬（菱川）広隆を据え、時に外部の有職家・絵師を呼んでいる。冷泉為恭も外部の絵師として、いわば「チーム紀州藩」なる書画班に加わっていたと考えられる。『南紀徳川史』や長沢伴雄の日記などからこの書画班の構成を推測してみる。

まずスポンサーは徳川治宝、差配役は仁井田好古（藩儒、『紀伊統風土記』編纂総裁）で実働部隊は以下の通りである。

長沢伴雄（有職・国学、絵巻模写・有職の知識を治宝へ還元）

加納諸平（国学、『紀伊統風土記』『紀伊国名所図会』編纂に十年以上携わる）

岩瀬広隆（紀州藩お抱え絵師、小野広隆）

大倉好斎（信古。古筆鑑定家、天保元年に紀伊国主に奉仕）

〈外部委託〉

菊池容斎・内藤溪次郎・冷泉為恭・浮田一蕙・貫名海屋^{（注1）}

このように近世後期の絵巻模写の一つの形は、国学者・絵師それぞれの単独の活動に加え、藩主（あるいは藩）の指示を受けた長沢伴雄のような制作統括の国学者を中心にチーム

(国学者・絵師・古筆鑑定家)を組み、彼の指示のもとで模写や書籍購入が行われたと考えられるのである。そのひとつの果実としてこの『年中行事画卷略』を位置づけることができるだろう。

しかし、なぜ御三家の治宝が絵巻模写を指示するのだろうか。本稿では見立てを述べるに過ぎないが、そこには学問愛好としての「好古」や時代思潮である「復古」という意識が横たわっていると考えている。

一例ではあるが、『春日権現験記絵巻』の模写が挙げられる。模写した大名は田安宗武・松平定信・徳川治宝の三者である。彼らは血縁・姻戚で繋がっている。この絵巻は鷹司家が所蔵していたもので、まず徳川吉宗の次男である田安宗武が模写を指示したものの途中で断念した。田安宗武は賀茂真淵を庇護したことで知られ、自らも歌集や国学についての著作を残している。その後、松平定信が父宗武の遺志を継ぎ、二十巻の模写を完成させた(桑名本)。さらに宗武の息女を正室としたのが徳川治宝である。彼は定信に強いあこがれを抱き、自らもまた、長沢伴雄に模写を命じて模本を作成している(東京国立博物館蔵)。いわゆる田安家の系譜である。またこの三者は雅楽や古楽、舞楽を復興させようとしていたことも指摘されている。^(主12) 治宝に至っては舞楽のための服飾へも関

心を示している。

しかし、私はこれらを単なる大名趣味としての「好古趣味」に留めてしまうことには慎重になるべきだと思っている。たしかに絵巻模写や雅楽復興は好古趣味のようではあるが、いずれも新しく再現・復元するという「行為」は単なる古物愛好や好古趣味ともすこし異なるのではないだろうか。そこに近世中後期の思潮の一つである「復古」という枠を当てはめることができるだろう。

近年の藤田覚氏や盛田帝子氏の諸論考に明らかのように、光格天皇の行った朝儀、神事の再興・復古は朝廷の権威・権力を回復した。^(主13)『年中行事絵巻』の模写は江戸時代初期の後水尾院の時代にも行われていた。後水尾院は王朝文化復興の一環として、住吉如慶に『年中行事絵巻』を模写させている。^(主14) いにしへの朝儀のありようを伝える『年中行事絵巻』を模写するという行為は朝儀復興を志向する象徴的な行為といえる。それを治宝が長沢に指示したということは光格天皇と同世代の治宝にも復古主義的な方向性が備わっていたということである。

絵巻模写の共作か否かに端を発した本稿であるが、絵巻模写も徳川治宝の文事という風呂敷のなかの一つにすぎず、そして治宝の文事も復古の流れの中にたゆたう一艘の草船にす

ぎないのである。しかし、その方向が自分たちの存在を脅かすことになるうとはよもや思ってもいなかっただろう。

おわりに

近世後期の絵巻模写は絵師・国学者それぞれの問題意識（画業修行・有職故実）で分析が進んでいる。本稿は国学者と絵師との共作の可能性を指摘しつつ、その背後によこたわる大名文事という視点を加えることで、近世後期の絵巻模写の意味を捉え直そうと試みたものである。絵巻模写はこれまで絵師・国学者個人の活動として捉えられることが多かったが、今後は大名の文事の要素を加えることも必要となってくるかもしれない。

また、すでに田安文化圏という枠組みがある。^(注15) この文化圏は和歌を軸とした同時代の横のつながりであるが、これに絵巻模写でみられたような、世代を越えた「復古」のつながりを加えることもできるだろう。いわば「拡大版」田安文化圏のような枠組みから近世後期の文芸や学芸を捉えていくことも可能かもしれない。

図版

図1 長沢伴雄稿『年中行事画卷略』（宮内庁書陵部蔵、162・195）「朝観行幸」部分模写



図2 同二十九丁裏「内宴」書き入れ



図3 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館管理、日
Y-1259）「蹴鞠」部分

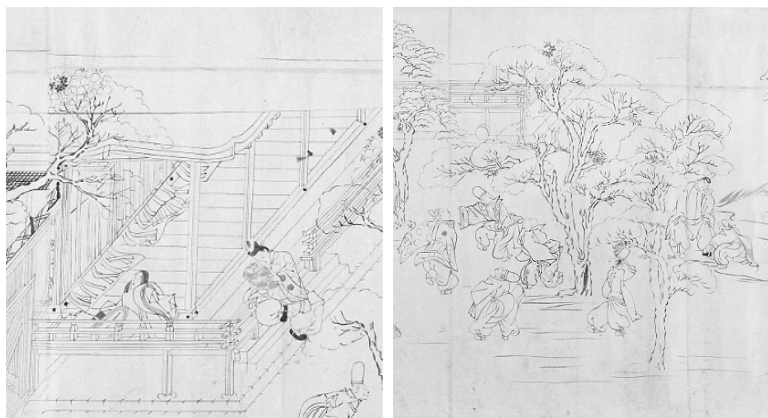


図4 冷泉為恭筆との検討 その1
上図 長沢伴雄『年中行事画巻略』「蹴鞠」（宮内庁書陵部）
下図 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館）



図5 冷泉為恭筆との検討 その2
上図 長沢伴雄『年中行事画巻略』「蹴鞠」（宮内庁書陵部）
下図 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館）



図6 冷泉為恭筆との検討 その3
上図 長沢伴雄『年中行事画卷略』「蹴鞠」（宮内庁書陵部蔵）
下図 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館蔵）

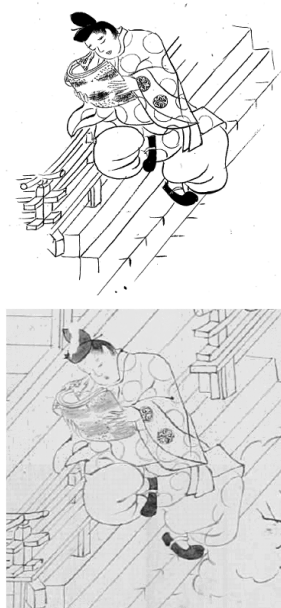


図7 冷泉為恭落款

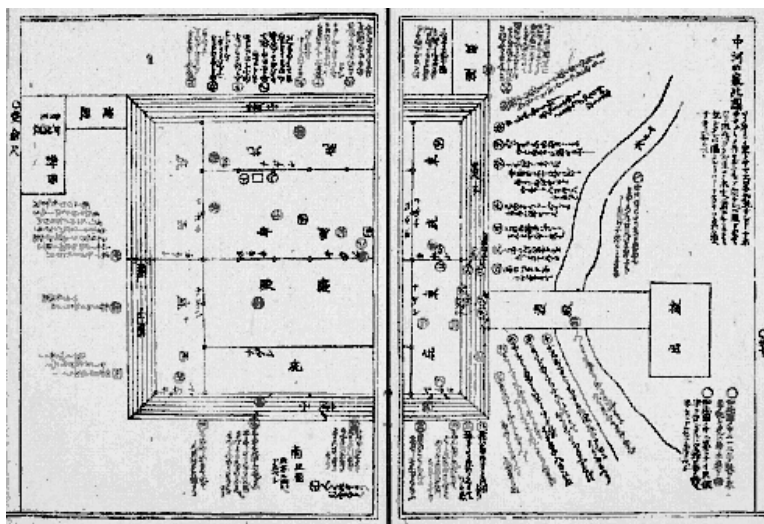
- (a) 長沢伴雄『年中行事画卷略』「内宴」書き入れ
- (b) 冷泉為恭筆『年中行事絵巻模本』（京都文化博物館蔵）
- (c) 冷泉為恭筆『善教房絵詞模本』（大和文華館蔵、天保十二年）

(a) 為恭
[哉。恭愚]

(b) 為恭謹言
[為恭謹書]

(c) 為恭筆
[為恭時年十九]

図8 萩原広道『源氏物語評釈余釈』（文久元年刊）「之巻」「空蟬巻余釈」「中河の家の図」（四〇丁ウ、四一才）



注

注 1

『年中行事画巻略』の書誌を以下に挙げる。

宮内庁書陵部蔵。大本二巻二冊写。長沢伴雄自筆稿、長沢伴雄旧蔵本。請求番号162195

表紙・二七・〇糶×一八・九糶、薄茶色横刷毛目模様

題簽・左肩無枠題簽に墨書「年中行事画巻略 上(下)」

扉・左肩に墨書「年中行事画巻考」

構成・上巻・扉二丁、遊紙一丁、長沢伴雄「年中行事画考」(天保十四年正月稿)八丁、本文(模写部分)五十三丁、下巻・遊紙一丁、本文七十二丁、計一三六丁。

小口題・「年中行事画略」

彩色・紙本着色・白描に部分淡彩

蔵書印・「紀伊国学問所」(朱陽方六・〇糶×六・〇糶)、「可自珍」(朱陽三・九糶×二・二糶、長沢伴雄蔵書印の一つ)

長沢伴雄は天保六年から九年にかけて江戸滞在中、伴信友・塙保己一などの蔵書を書写する仕事に従事している(拙稿「伴信友と長沢伴雄の邂逅——紀州藩蔵書形成の一側面——」、「もう一つの古典知 前近代日本の知の可能性」、アジア遊学一五五、勉誠出版、二〇一二年)。江戸滞在中には武家故実の伊勢家へ入門し、また天保九年より京で文方の方高倉家・竹屋家へ入門し、有職故実を学んでいる(拙稿「絵巻はなぜ模写されたのか——国学者長沢伴雄の『春日権現験記』模写一件——」、「文献探究」第四十六号、文献探究の会、二〇〇八年)。

上野山寅雄蔵『都の日記』(土居次義「長澤伴雄の『都の日記』に見ゆる為恭資料」(『美術史学』、昭和十八年四月号、東京美術研究所、二二六―二二八頁) 七月二日条「冷泉三郎といふ男とひ来る、五歳より画をよくかきて、古画類あまたうつしたりとかなる、当時十八歳也、いとおもしろき志ある男也」とある。

注 2

注 3

注 4

注 5

注 6

注 7

注 8

注 9

注 10

注 11

注 12

注 13

注 14

注 15

当時、為恭十八歳、長沢伴雄三十三歳である。以後、祭見物などに同道する様子が同日記に散見する。

注 4

拙稿「伴信友『史籍年表』刊行前後——近世後期年表編纂の一齣——」(『鈴屋学会報』第三十六号、鈴屋学会編二〇一九年)

注 5

「特別展 復古大和絵師 為恭——幕末王朝恋慕——」(大和文華館編、平成十七年十一月発行)一七四頁「落款・印章」掲載の「善教房絵詞模本」の落款による。「善教房絵詞模本」は天保十二年三月四日、長沢伴雄が徳川治宝の命を受けて冷泉為恭に「善教房草紙絵」を写させたという(逸木盛照「冷泉為恭の生涯」便利堂、一九五六年、二三八頁)。

注 6

前掲注5参照。

注 7

長沢伴雄は天保十四年五月頃より『法然上人絵伝』の模写を計画し、自身の日記(台湾大学図書館長澤文庫蔵『絡石の落葉』OGG)天保十四年五月十日条に次のように記している。

注 8

十日、霽。けふ智恩院の寺中なる通照院といふ寺の書院を借て、そこに転りぬ。さるはこの本坊に秘蔵する法然上人の画伝をいかで摸しとりてんのかまへなるに(下略)

注 9

冷泉為恭も同年六月より知恩院所蔵の「法然上人絵伝(法然上人行状図)四十八巻の模写を行っていたことが「知恩院日鑑」(天保十五年七月二十五日条、松村政雄「為恭落款年譜」、三一九頁、「国華」八八四号、一九六二年)にみえる。つまり「年中行事絵巻」同様、長沢伴雄と冷泉為恭は同時期に同じ作品の模写に関わっていたのである。

注 10

拙稿「近世後期類題和歌集編纂の一齣」(『近世文芸』第九十号、日本近世文学会、二〇〇九年)

注 11

近世後期の源氏物語注釈において、松岡行義「源語図抄」、斎藤彦磨「源語図集」など図面や絵画を用いた住宅考証が進展するが、これには寛政の御所造営に関わった裏松固禪の『大内裏

注 12

注 13

注 14

注 15

注 16

注 17

注 18

注 19

注 20

注 21

注 22

注 23

注 24

注 25

注 26

注 27

注 28

注 29

注 30

注 31

注 32

注 33

注 34

注 35

注 36

注 37

注 38

注 39

注 40

注 41

注 42

注 43

注 44

注 45

注 46

注 47

注 48

注 49

図考証』の影響が見られるとの指摘が住宅史の観点からなされている（赤澤真理「19世紀における『源氏物語』住宅考証書の成立と展開——『源氏物語』の考証研究にみる寝殿造理解の研究（1）——」、「日本建築学会計画系論文集」第七十五卷第六五一号、二〇一〇年五月）。ここに視覚的資料としての絵巻と有職故実研究の親和性、そして、それらの成果を物語解釈へ援用しようとする国学者の姿が見える。

注10

『天皇の美術史』 朝廷権威の復興と京都画壇（五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明著、吉川弘文館、二〇一七年）

注11

菊池容斎は江戸後期から明治初期の絵師。『前賢故実』の作者として知られるが、『南紀徳川史』第二冊巻之十七「舜恭公」[故実有職御熱心之事]に「(天保九年)十月二十九日菊池容斎へ大極殿朝拝之図申付候様御沙汰二付申遣ス」(五三〇頁)とある。また内藤溪次郎については不明。同じく前掲『南紀徳川史』第二冊巻之十七に「(天保九年)十二月二十六日、年中行事画之内関白加茂詣左近衛謝二巻出来差上ル。右ハ江戸内藤溪次郎へ申遣シタルモノニ見ユ」(同)とある。浮田一蕙は復古大和絵師。冷泉為恭よりも先に紀州藩の活動に参加している。天保十一年の長沢伴雄の在京日記『都の日記』(台湾大学図書館長澤文庫蔵、06702)五月六日条に「今日より浮田可為来る。春験記彩色に取かゝる」とある。また貫名海屋(菰翁)は江戸時代後期の儒学者・書家・文人画家。幕末の三筆として名を残すが、前掲『都の日記』六月二十一日条に出てくる。貫名海屋は高野山で手に入れた古画を長沢に見せ、「有用の物かいかにおのれ古画の事疎ければ識者に見すべし」と、汝に見せまいゐらすなりといひてとり出づ」とある。長沢の自己顕示も垣間見えるが、時として長沢が貫名海屋を利用することも考えられる。福井久蔵『諸大名の學術と文藝の研究』下巻(原書房、一九七

六年五月復刊)「諸侯と国学」「諸侯と芸術」。

注13

藤田覚『幕末の天皇』(講談社選書メチエ、一九九四年)、盛田帝子『近世雅文壇の研究』(汲古書院、二〇一三年、飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇——朝儀復興を支えた文芸ネットワーク』(勉誠出版、二〇一八年)。

注14

下原美保『江戸時代初期における王朝文化復興と住吉派興隆との関係について——後水尾院と住吉如慶を中心に——』(鹿兒島大学教育学部研究紀要)五十八巻、二〇〇七年。

注15

久保田啓一氏が提唱されている枠組みで、幕末の田安家(田安斉匡)を中心として福井藩(松平春嶽、斉匡六男)・阿波徳島藩(蜂須賀斉裕、斉匡甥)・柳河藩(立花鑑寛、正室斉匡女純姫)など血縁・縁戚を土台として、そこに井上文雄(田安家侍医)という共通の和歌の師を据えて形成している(久保田啓一「幕末柳河藩の歌合」、『雅俗』第三号、一九九六年一月、および同「幕末田安文化園史構築の試み」、柳川資料集成月報二二)。

本稿は九州近世文学研究会および絵入本学会ワークショップでの口頭発表に基づくものである。席上、ご教示を賜りました中谷伸生・日比谷孟俊・盛田帝子・門脇むつみ・加藤弓枝・小林ふみ子・佐藤悟・廣瀬千紗子各先生方(敬称略)には書してお礼申し上げます。

尚、本稿は「近世後期写本文化の横断的研究——未整理古典籍・台湾大学・絵巻模写の学術的調査——」(科学研究費補助金 基盤研究(B)、研究代表者亀井森、課題番号20H01231)の助成を受けたものである。

(かめい しん・鹿兒島大学准教授)